



淡路島を舞台に幅広く農学を学び、 地域創成に貢献するリーダーを養成

吉備国際大学 農学部 地域創成農学科



キャンパス近くの広大な農場で 季節の野菜を育てています

淡路島には農閑期がないため、「フィールド実習」を通年で行うことができます。季節に応じた野菜を、仲間と協力し合いながら育てています。写真は、特産の玉ねぎの収穫の様子です。(富永さん)

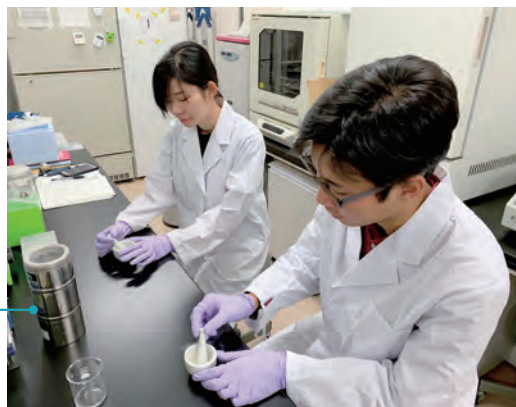


希少な柑橘、ナルトオレンジを 守るための研究をしています

ナルトオレンジは、約300年前に淡路島で誕生した柑橘ですが、栽培する農家は現在十数園。果皮の香りが強いなど、魅力の多い柑橘なので、後世に残すために研究中です。(阪上さん)

果実のDNAを分析し、繁殖過程を調べています

ナルトオレンジの葉からDNAを抽出し、どのように繁殖してきたのかについて分子生物学的な研究を行っています。卒業研究では、種子のないナルトオレンジの開発にも取り組みたいと思っています。(富永さん)



「フィールド実習Ⅰ・Ⅱ」では、米
カリキュラムに組み込まれており、
だ。本格的な農業実習が1年次から
や見学を通して間近に学べること
業化（*2）までのプロセスを実習
む専業農家が多い淡路島で、6次産
同学科の魅力は、大規模農場を営
ている。

1年次から自分たちで 作物を育てる実習がスタート

吉備国際大学農学部地域創成農学
科（*1）は、日本有数の農業生産
地である淡路島にキャンパスを有し
ている。農業の生産・加工・経営全
般にわたる専門的な知識と技術を学
び、地域創成に貢献できるリーダー
を育成するカリキュラムを特徴とし
ている。



農学部
地域創成農学科4年
阪上綾香
さかうえ・あやか
兵庫県立伊丹北高校卒業。
農家になるのを目指して、
同学科に入学。



農学部
地域創成農学科3年
富永和希
とみなが・かずき
大阪府立北千里高校卒業。
農業と地域創成に興味があり、
同学科に入学。

*1 2018年4月、醸造学科の開設に伴い地域創成農学部は学部名称を農学部に変更。今回取材した2名は旧地域創成農学部地域創成農学科のカリキュラムを履修している。
*2 1次産業を担う農林漁業の生産者が、2次産業である加工と、3次産業である流通・販売にも取り組むこと。

や野菜などを育てながら、栽培技術の基本を習得する。実習はキャンパス近くの農場で行われ、学生が5人程度のチームとなって、課題作物を中心に育て、その出来栄を競う。4年生の阪上綾香さんは、その実習を次のように振り返る。

「春学期の課題作物はスイカで、水や肥料をやる頻度、雑草の除去などは、チームごとに計画して行いました。最後は収穫したスイカの糖度や重さを競ったのですが、同じ畑でも、手間のかけ方でスイカの味が大きく変わることを学びました」

農業における生産だけでなく、加工・経営まで幅広く学ぶ

1・2年次は、農業技術、食品化学・加工、農業経済・経営、地域創成の4分野の基礎を学ぶ。3年生の富永和希さんは、1・2年次に生産についてだけでなく、流通学や生物学なども学び、視野が広がったという。

「特に興味を持ったのは、『植物育種学概論』です。祖父が米農家で、イネの病気に悩んでいたので、イネの品種改良を学べば多くの農家に役立つと思いい、3年次以降、育種学を学べる分野に進もうと決めました」

農業の「今」に触れ、進路選択に役立てる

3年次からは、「農業技術分野」「食品化学・加工分野」「農業経済・経営分野」「地域創成分野」から1つの分野を選択し、より専門的な知識や技術を学ぶ。さらに、「食農コープ実習」では、南あわじ市役所や市内の農業法人などで就業体験をする。富永さんは、玉ねぎを育てる農業法人で実習をした。

「1年次の実習でも玉ねぎを育てましたが、3年次の実習先では商品として販売するため、より厳しく選果をするなど、1年次とは違いがあり、現場で学ぶ意義を感じました」

同学科では、地域の農家との交流行事もあり、阪上さんは、女性農家と交流できるイベントに参加した。

「大学の实習や農家でのアルバイトを通じて、正直、女性が農業を仕事として続けるのは体力的に厳しいと感じていました。でも、イベントで女性の農家の方と話し、手入れの頻度を工夫するなどして効率的に作物を育てることで、仕事の負担を減らすことができると知って、将来への希望を持てました」

地域創成につながる研究に取り組む

阪上さんと富永さんは、「農業技術分野」コースの松原健一郎准教授の研究室に入り、ともに特産のナルトオレンジについて研究している。富永さんは当初、イネの品種改良を専攻しようと考えていたが、地域とかかわりながら研究を進める先輩に触発され、ナルトオレンジを研究中だ。

阪上さんは、ナルトオレンジが淡路島でどのように繁殖したのかを追究する卒業研究に取り組んでいる。通常、柑橘は接ぎ木（*3）で増やすが、ナルトオレンジは種からも繁殖させていったのではないかと仮説を立てた。島内の農家を1軒ずつ訪ねて、ナルトオレンジを地域活性化につなげたいという想いを伝えることで、オレンジの葉を提供してもらい、DNAマーカー（*4）を調べている。

「実習や研究を通じて、地域の方とつながりながら働く農業の魅力を確認しました。内定をいただいた小売業の会社では、農業も営んでおり、大学の学びを生かしていきたいです」（阪上さん）

大学の思い

地域創成のチャンスは農業にこそある



農学部地域創成農学科
准教授
松原健一郎
ひばら・けんいちろう

本学科の大きな特徴は、自然豊かな淡路島において、大規模農場を営む農業農家の近くで学びを深められることです。大学の農場は、農家の農場に囲まれているため、周囲の農家の種植のタイミングに合わせて作物を育てていきます。少しでも草むしりを怠ると、農家の方に厳しく叱られます。

農家の減少は、どの地域でも大きな問題ですが、農業が地域創成のチャンスになると考えています。例えば、育てにくく収穫量の少ない作物でも、味の個性を打ち出せば、地域活性化に貢献することができます。本学科では、強い香りに特徴のあるナルトオレンジについて様々な視点から研究を行い、地域活性化につなげようと考えています。実際に、ナルトオレンジを使ったアイスの開発など、企業と連携し、商品化につながったケースもあります。

本学科には、農家になりたいと入学する学生も多くいますが、就職先は公務員、製造業、小売業と様々です。農業をトータルに学習し、地域のために活躍できる人材をこれからは育てていきたいと考えています。

*3 植物の枝を切り取って、類似の植物に接合させて増やす方法。柑橘は接ぎ木で繁殖させることが多い。
*4 遺伝子の本体であるDNAを構成する4種類の塩基の並び方を調べ、品種や個体を識別させる際の目印のこと。